



## 貢献できる人材になるために未来への“種”を蒔き続ける

IASB客員研究員(インタビュー時)

倉持 亘一郎 Koichiro KURAMOCHI

朝日監査法人、米国KPMG シリコンバレー事務所、あずさ監査法人、金融庁 企業開示課 国際会計調整室を経て、2013年7月から2017年6月までIASB客員研究員として、IASBロンドンオフィスにて基本財務諸表プロジェクト等に従事。2017年7月からあずさ監査法人。



受験生時代に“公認会計士になり社会の役に立ちたい”と思ったことをきっかけに、ストイックなまでに努力を重ねてきた倉持亘一郎会員。その努力が実り、今では国際会計基準審議会(IASB)の客員研究員として、世界を舞台に活躍する会計人へと躍進を果たした。そんな倉持亘一郎会員がこれまで歩んできた道のりと、未来を担う後進へのメッセージを語っていただいた。

### 真面目に、誠実に 社会に貢献をしたい

—受験生時代は、どのような会計士になりたいというイメージをお持ちだったのですか。

明確な目的意識が無い中で受験勉強を始めてしまったため、試験に合格することだけが目的になってしまっていました。優秀な皆さんが大変努力をされている中で、いったい自分は何のためにこんなに大変な勉強をしているのか、自分よりもっと会計士にふさわしい方々が合格した方がいいのではないか、と真剣に悩む時期もありました。

受験勉強をしていた当時、公認会計士監査に社会から厳しい批判が寄せられ、「公認会計士監査の信頼回復」が強調されるようになりました。私が目指している会計士という職業が社会から信用を失っているということを聞き、大変がっかりし

たのを覚えています。それまで監査論は字面だけの暗記科目だと思っていましたが、改めて読むと、公認会計士という職業がなぜ存在しているのか、制度上期待されている役割は何なのかということも伝える科目だと気がつきました。そして、自分自身がその重要で大変難しい役割を果たせるよう努力を重ねていく覚悟があるのか、それとも単に資格が欲しいから勉強しているのか、問われている気がしました。その時、試験に合格するということは目的ではなく手段に過ぎず、公認会計士として制度で期待された役割を果たすことこそが目的なのではないか、そして、もし仮に自分が会計士になれば、真面目に、そして誠実に社会に貢献をしたいと思うようになり、この時初めて、公認会計士という職業を本気で目指したいと思えるようになりました。それまで無味乾燥だった会計士試験の勉強は、もし将来公認会計士になれば、その役割を果たしていく上で知っていなければならない基礎知識を身につけるものだとして整理できたことで、勉強に対するやる気は飛躍的に高まり、それから真剣に勉強を続け、運よく合格することができました。

—会計士試験に合格されて入られた法人で、もともと国際系の仕事もされていたのですか。

はい。2次試験の受験を終えるまで英語は決して得意ではありませんでしたが、配属は国際部を希望し、新人時代からいろ

いろと国際的な業務をさせていただきました。もともと国際的な業務に興味があったわけではありませんが、ちょうど2次試験の勉強をしていた時に大きな2つの動きがありました。会計ビックバンと国際会計基準です。

会計ビックバンは、当時行われていた日本基準の大幅な改訂で、その背景にはいわゆるレジェンド(警句)問題もありました。この当時、国際基準の代名詞は米国基準でしたので、いつの日か米国に駐在し、高品質な国際基準といわれる米国の会計基準、監査基準に基づく監査実務に従事したいと真剣に考えました。

もう一つの動きは国際会計基準です。各国証券規制当局の集まりであるIOSCOが、国際会計基準のコアスタンダードの検討作業をはじめ、クロスボーダーの資金調達において国際会計基準を認める方向に大きく動いていたタイミングでした。

最後に受験をした年は、経済的な理由から試験に落ちたらもう会計士はあきらめようと思っていました。不合格だった場合に資格が無くとも就職先を探せるように、そしてもし合格していたら国際部に配属してもらえるように、二次試験を受けた後合格発表までの2ヵ月間、真剣に英語を勉強しました。結果的には運よく会計士試験に合格し、国際部、当時のアーサー・アンダーセンの事業部に配属していただき、外資系クライアントの監査業務等に従事しました。

## きつい時期ほど見返りも大きい

—失礼ながら、もともと英語力はどのようなレベルだったのでしょうか。

大学受験時、英語は苦手科目で、その後も会計士の二次試験が終わるまでほとんど勉強しませんでした。楽器の習得と同じように、英語ができる方々は小さい頃から英語を勉強したことで身に着けた絶対音感のようなセンスがあって、小さい頃英語を勉強しなかった自分にはセンスが無く、頑張っても大してできるようなにはならないというあきらめがありました。何の根拠もない言い訳ですね。ただ、二次試験に不合格だった場合には厳しい職探しに直面することが分かっていたし、会計士試験のおかげで朝から晩まで勉強する習慣が身につけていたので、二次試験受験終了後すぐに気持ちを切り替えて、合格発表日直前までひたすら英語の勉強をしました。基礎的な語彙から学び直したのですが、その時に使った速読速聴英単語という本は素晴らしい本でした。最初自分には難しすぎる内容でかなり時間はかかりましたが、あきらめずに最後まで丁寧に勉強し、毎日繰り返しシャドーイングをしたことで、語彙、読解力、リスニング力を大幅に鍛えることができました。この時、「英語は努力次第で何とかできるのではないか」、という希望を持つことができました。

運よく二次試験に合格して監査法人で働き始めてからは、英会話学校に通い始めました。英会話の先生は、いいところをうまく探してほめてくださるのですが、自分は元来怠け者なので、少しほめていただくだけでストイックに努力しなければならぬという気持ちはなくなり、仕事が忙しかったこともあり、週1回1時間程度の英会話の時間以外英語を勉強しなくなってしまいました。また、英会話学校で学ぶ内容は当時の仕事内容には直接関係ないと感じました。このままでは将来米国に駐在する夢など永遠にかなわないとわ

かっていても、どうしてもやる気がでません。そこで、自分を追い込むため、英会話学校を辞めて、米国公認会計士、いわゆる“USCPA”の勉強を通じて会計や監査に関連する英語のボキャブラリーを増やすことにしました。結果的に、ボキャブラリーを増やすのみならず、米国会計基準や米国における監査手続の勉強になり、とても仕事に役立ちました。

その後、三次試験の勉強が終わった後に、「US Mobility Program」と言われる米国KPMGの駐在プログラムに申し込みました。これは、米国に上場する米国の企業の監査に従事することができる厳しいプログラムでした。実際に米国に行ってみると、駐在直後から上司、部下、監査先の担当者もアメリカ人という大変過酷な環境で、インチャージとして高い水準の成果を求められました。その時はとにかく毎日必死で精神的な負担も大きく、持たないかもしれないと思いました。ところが、3ヵ月ぐらいたったときにフッと、仕事になり始めていくことに気が付きました。過酷な環境で日々多くの事を学んだ結果自分自身のスキルが上がり始めていたのでしょう。その時にしみじみと感じたのは、恐らく、この米国駐在は人生で一番か二番に厳しい経験になるかもしれないけれど、それと同時に、人生で一番か二番に見返りの大きい時期になるのではないかと、いう事でした。その瞬間から、厳しい環境で頑張ることこそが自分のスキル向上につながると考え、頑張れるようになりました。米国の上場企業監査の実務は、リスクアプローチのあるべき論に従いリスクの高いエリアに対して徹底的に監査手続を実施するもので、大変勉強になりました。このUS Mobility Programは、米国における会計・監査の実務を深く知る機会となっただけでなく、自分の英語力を大きく向上させる機会となったのは間違いありません。

—それはすごいですね。ところが、そこで満足するわけではなかったんですね。

英語力が向上したといっても、米国駐在から帰国する時の心境は、「英語はもう問

題無い。」といったものではなく、「自分の英語力はネイティブの中で仕事をする上で不自由無く使えるレベルには全然達しなかった。」といったものでした。それにもかかわらず、米国駐在という長期目標が達成されたことで、帰国後、怠け者の自分は英語の勉強に対する意欲を失ってしまいました。そんな時に、ものすごく英語が上手な通訳を目指す妻の友達から、プロの通訳を養成する学校の話を知りました。そこはかなりスパルタで、まわりの生徒たちもプロの通訳者になることを夢見て相当勉強しているレベルの高い世界だと。日本に帰国後、衰えつつあった英語力を維持し、できれば向上させるため、その厳しい通訳学校に行ってみようと思ったのです。

評判通り通訳学校は大変厳しい場所で、進級試験に2度続けて落第したときは本当にショックで、「これが自分の英語力だ。」と思い知らされました。そのときから本気で通訳の勉強をするようになり、最終的に4年半かかりましたが、通訳者になるための最終課程である同時通訳科を卒業しました。

## 勉強せざるを得ない環境を無理やりつくる

—そして、その英語力によってご自身の人生が大きく変わることになったんですね。活躍の場が一気に広がったのではないですか。

相手の発言を正確に理解しつつ、自分の言いたいことを正確に伝える、という通訳学校で叩き込まれたスキルは、仕事にとっても役に立ちました。金融庁で働いていた際には、様々な国際会議に出席させていただくことができました。そして、その後、IASBへ出向するというお話も頂くことができました。

IASBへの出向というお話を頂いたときは、IFRSのエキスパートであるネイティブスピーカーばかりの組織の中で、「日本人と比べて英語ができる、IFRSを知っている



というだけでは現地スタッフと比べて人並みの貢献すらできないのではないか」という強い危機感をもちました。

ではどうやって組織に貢献をするのか？さんざん悩んだ挙句、ファイナンスの勉強をすることにしました。平日はIASBの客員研究員としてプロジェクトにおける役割を果たすため精一杯業務に取り組みつつ、週末は現地の大学院に通い、投資銀行やコンサルティング会社のバックグラウンドを持つクラスメートに交じて、投資家が財務諸表本表、注記、MD&A、ブルームバーグ等からどのような情報を収集してモデルを作り、投資判断を行っているのか、といったこと等を勉強しました。模擬的なアナリストリポートのようなものをグループで作ったりしたことで、どのような財務情報がなぜ投資家にとって必要なのか等、とても勉強になりました。上司にも説明して、仕事には一切支障をきたさないし、その分、組織に貢献する、ということを前提に許可をいただきました。

一どうして、ストイックなまでに勉強を続けられるのですか。

職場で求められることに臨機応変に対応される優秀な方々はたくさんいらっしゃいますが、自分は要領が悪いことを自覚しています。ただ、会計士試験を通じて、時間がかかってもあきらめずに努力を続ければ、そんな自分でも新しいスキルを身に着けることはできる、という事も分かりました。全くの個人的な意見ですが、仕事のやりがいというのは、社会、組織、周りの方々等に少しでも貢献できたと思える仕事ができるかが重要なのではないかと思います。公認会計士という職業に就かせていただいた以上、制度において期待されている役割をできる限り果たしたい。そのためには自分自身が納得できる水準の仕事をして、所属する組織がその目的を達成できるよう少しでも貢献したい。そして、いい仕事ができる、組織に貢献できる人材になるためには、自分の能力を上げていかざるを得ませんので、将来に向けて種をまき続けるのです。自分は怠け者で、また、仕事も大変忙しいので、仕事と勉強のバランス

を取ろうと思っても、どうしても仕事の方にだけ天秤が傾いてしまいます。そうすると、反対側によほど重いものを載せなければ天秤はバランスしませんよね。ですから、重い仕事と釣り合うくらいに、勉強せざるを得ない環境を無理につくって、勉強と仕事のバランスを取ってきました。

---

### 国際的な枠組みの中で 貢献できる若い人への期待

---

一IASBでの仕事について教えていただけますか？

国際会計基準審議会 (IASB) はロンドンに本部を置く、会計基準設定主体です。世界各国の金融市場で使われる国際会計基準の設定を通じて、金融市場に透明性、説明責任及び効率性をもたらし、また、グローバル経済の信頼、成長、長期的な金融安定を支え、公益に資することをその使命としています。世界30か国以上から集まった人種も国籍も異なるボードメンバーや

スタッフがグローバルスタンダードの開発という共通の目的のために力を合わせて働いています。その中で一緒に働かせていただく機会をいただけたことは、本当に難しい経験だと思います。IASBで働くという貴重な機会を与えて下さった方々に対してはもちろん、直接的、また、間接的に多くの方々のお世話になっており、深く感謝しています。

IASBでは現在、基本財務諸表プロジェクト(例えば、損益計算書を投資家の投資判断により有用なものとするため、業績指標の記載や比較可能性を高める方法を検討)に従事しています。世界中の投資家の方々にお会いし、どういった情報が投資意思決定に必要かご意見を伺い、財務諸表の改訂の必要性について様々な分析を行っています。

IASBの仕事で特に苦労しているのは、英語のライティングです。スタッフは、公開会議で使われる文書を英語で執筆しなければなりません。ネイティブスピーカーが書く文書と同じレベルのクオリティが求められます。IASBで働き始めて4年目になりますが、英語の文書を作成する都度、自分の力不足を痛感しています。

**一国際機関での活躍に向いている人はどのような人ですか?英語ができるかできないか、ということが重要なのでしょうか。**

現実問題として、ある程度英語ができないと仕事にならないという面はあると思います。ただ、英語の問題は努力次第で必ず解決できます。それよりも、その国際機関が国際社会で果たさなければならない役割に本心から共感できるかどうか、ということが重要なのではないかと、思います。グローバル化が進むキャピタルマーケットが健全に発展していくためには、国ごとの枠組みで課題に取り組むことに加え、国際協調の枠組みを通じて共通の課題に取り組んでいくことの重要性も更に増していくことと思います。しかし、国ごとの利害やバックグラウンドの違いもあり、国際機関の活動が各国の利害の綱引きの場になってしまうリスクもあると思いま

す。このような国際協調の枠組みで貢献していくためには、その国際機関が公益に従った役割を果たしていけるよう、与えられた業務に信念と責任感を持って取り組めるか、異なる立場の意見にもしっかりと耳を傾け理解した上で伝えるべきことを伝え相互理解を築くことができるか、その組織に貢献する上で必要となるスキルを身に着けるために努力を惜しまないか、といった点が重要なのではないのでしょうか。

**一ありがとうございます。最後に海外の大きな舞台で活躍されている倉持様から、国際舞台での活躍を目指す会員へのメッセージをいただければと思います。**

私などよりもグローバルに活躍されていらっしゃる日本の公認会計士の方々がたくさんいらっしゃるで大変僥越ですが、より多くの公認会計士の皆様に国際的に御活躍頂きたいと思いますので少しコメントをさせていただきますと、国際舞台での活躍を目指される方々は、まずは今働いている組織での役割をしっかりと果たすことで、チャンスが与えられる可能性を高めることができるのではないかと思います。チャンスが与えられた時に準備不足ですと大変もったいないので、国際的に活躍できる人材になるという夢を今から持ち、仮に機会が与えられた時に十分な貢献ができるよう、必要な研鑽をしっかりと積んでおかれるといいのではないのでしょうか。

また、チャンスが与えられた時に貢献できるよう事前に準備をする事は、ご自身がそのチャンスにふさわしい人材になるという事につながり、結果的にチャンスが与えられる可能性を高めるのではないのでしょうか。

しっかりと準備をした上で、いつの日かチャンスが与えられたら全力で取り組み、与えられた役割を全うしていただきたいと思います。機会を与えていただいたときに期待された貢献をすることができれば、将来更に新しい機会が与えられる可能性も出てくるのではないのでしょうか。

今会計士試験に取り組んでいらっしゃる

る皆さんにお伝えしたいのは、会計士試験は大変な試験ですが、皆さんが将来公認会計士として社会が期待する役割を果たしていくために必要な知識を身に着ける、とても大切なプロセスだと思います。また、目標を設定してそれに向かって努力する習慣を身に着けるという意味でも素晴らしい機会ですので、ぜひ頑張ってくださいと思います。

このインタビューは2017年3月3日に実施されました。



〒102-8264 東京都千代田区九段南4-4-1  
TEL:03-3515-1120(代表)  
03-3515-1130(国際グループ)  
<http://www.hp.jicpa.or.jp/>